
彼は優しいご主人様

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼は優しいご主人様

【Nコード】

N6678U

【作者名】

Rail

【あらすじ】

ぶくぶくと太り、潰れたカエルのようにおぞましいほど醜い地方領主グレン・グレゴリー。彼はとある目的のために数多くの奴隷を買い集めていた。

そして今日もまた、美しいエルフの少女が彼の屋敷へと買われて来たのだった――

現代で死んだ男が転生して、奴隷を買い集めて現代知識を生かしつつ成功する過程とその後の話。

<http://2chcopipe.com/archives/51761911.html>↑これ見てどんな話か空想してどうやったらこんな感じになるか妄想した結果が残念なことに。

* 当作品にはエロ要素やハーレム要素はございません。ラッキースケベすらございません。全年齢対象です。そういったものを期待されて読むと大変がっかりなするのでご注意ください。

A面 エルフの少女、ティエラ（前書き）

<http://2chcopipe.com/archives/51761911.html>↑これ見てどんな話か空想してどうやったらこんな感じになるか空想した結果が残念なこと。

A面 エルフの少女、ティエラ

部下が連れてきた見目麗しいエルフの女奴隷をみて、グレンは相好を崩した。脂肪でたるんだ顔がぐにやりとゆがむ。

奴隷は年の頃なら十代半ば。まだまだ子どもだ。

着ている服はほとんどぼろ布と変わらず、奴隷の印である鉄の首輪がやけに存在を主張している。

「今回はずいぶんとかわいらしいのを連れてきたな？」

ぶくぶくに太った指でグレンはできものだらけの顎をなでた。

「はい。つい最近北の方から入荷されてきたそうです」

グレンの腹心の部下であるエルフのアルバートは恭しく答えた。

同じエルフであるにも関わらず人間に仕え、なおかつ奴隷である自分を買ったアルバートに、エルフの少女は憎しみのこもった目を向けた。

「名前は？」

「ティエラと」

「気が強そうだ」

「見所があるかと思ひまして」

アルバートは涼しい顔で答えた。グレンは全身の肉をふるわせて笑った。

「お前の鑑定眼は信頼している。あとはいつも通りに」

「かしこまりました」

美しい辞儀をするアルバートに手を振ると、グレンは重厚なカーペットをぐしゃぐしゃと踏みつぶしながら部屋から出ていった。

「さて……」

アルバートがティエラに向き合う。ティエラは警戒して身を堅くした。アルバートはため息をつく。

「その格好で今のようにご主人様の目の前に出てもらっちゃ困る。まずはその汚いなりをなんとかしてもらおうか。たっぷり着飾って

お前を歓迎する宴に出てもらおう」

風呂場に連れて行かれながら、ティエラは先ほど見た太った蛙のように醜い自分の新しい主人を思い出す。そしてこれから自分の身に降り懸かるであろう災厄にティエラは涙を浮かべずにはいられなかった。

そして一時間後。

鉄の首輪の代わりに白いリボンを巻かれ、小綺麗な白いドレスで着飾られたティエラは、大広間のラグの上に座っていた。

「ようこそティエラ、グレゴリー邸へ！」

幾人もの声が重なり、魔法のクラッカーがにぎやかに音を鳴らす。蓄音機からは美しい調べが流れていた。部屋にいくつも置かれたロ―テーブルの上には豪華なご馳走が並んでいる。至るところに花が飾られ、なぜか色紙でできたわっかの飾りらしきものや謎の模様が書かれた旗が連なったものなどが天井や壁を這う。

ティエラの歓迎の宴、すなわち新人歓迎会が盛大に開かれたのであった。

彼女の周りには二十代から四十代に至るまでの男女が集まっていた。この邸の使用人たちだ。

ポカンとしているティエラの様子を、使用人たちは笑った。

「歓迎するよ、ティエラ」

「そんなに緊張しないで。誰もあなたをとって食ったりしないわ」

「僕はテッド。よろしくね！」

「俺はマーカス！ 初めましてティエラ！」

次々とかけられる暖かな言葉に、ティエラは眼を白黒させた。

ティエラは間違いなく奴隷だった。村が賊に襲われ、両親は反抗して殺され、ティエラは捕らえられて奴隷商人に売られた。嫌な気

配のする鉄の首輪もつけられた。

奴隷に人権はない。この先ぼろ雑巾のようになるまでこき使われるか、死にたくなるくらいの恥辱を味わうのだろつとばかり思っていた。

それがなぜだかわからないが、現在ティエラの首から首輪は取り外され、代わりに柔らかで高級そうな白いリボンがつけられていた。それに合わせてか、彼女に着せられたドレスも白く、上質で上品だ。いつまで立つても固まっているティエラに、周囲からは暖かい視線が向けられていた。

「アルバートってばまた新人に教えなかったんでしよう！ 性格悪いわ！」

肌の黒いエルフ——海エルフと呼ばれる——の少女がぷりぷりと頬を膨らませる。

彼らと同じくティエラの歓迎の宴に参加していたアルバートは眉を上げた。

「教えたって信じないんだから、労力の無駄だと思わないか？ 百聞は一見にしかずだ」

「そんな難しいこと言われてもわかんない！」

「勉強をさぼって遊んでばかりいるからだ」

「ヘーんだ！ アルバートの石頭！」

「知恵の数より毛が多い奴に言われてもね」

「まあまあ二人とも、主役がいるのに喧嘩なんて今日くらいは止めてよ」

全身がうつすらと白い毛に覆われた獣人の女性が仲裁に入る。

ティエラはその様子をただただ呆然として見ていた。

と、そこへドワーフの男がやってきて、ティエラの隣にどっかりと腰を下ろした。

「新入り、あつけにとられてるな。気持ちは分かるよ、俺も最初はそうだった。まあ飲めよ」

そう言つてドワーフの男がティエラの杯に並々とワインを注いだ。

「ね、どこから来たの！？ 好きな食べ物何！？ 趣味は！？」

眼をきらきらさせながら小さな妖精がティエラの周りを飛び回る。

「みんな、落ち着いて！ ティエラもおなかも空いてるんじゃない？ 食事を始めましょう」

人間の若い女性が手をたたいて言えば、方々から同意の声があがった。

そうして、歓迎会が始まる。

戸惑うティエラに、邸の使用人たちは優しく接してくれた。

頬の落ちそうなほどおいしい食事をほおぶりながら、これは夢じゃないのかとティエラは自身の膝をつねったが、幸い夢ではないようだ。

ティエラは使用人たちから一人一人丁寧な自己紹介を受け、挨拶を交わした。

と、ノックの後に大きな扉が開いた。入ってきたのは先ほど見たティエラの新しい主人グレンだ。

ティエラはぎくりと身をこわばらせた。先ほどとは印象が多少変わったとはいえ、おぞましいほどの醜さだ。

「急な仕事が入ってな。遅れた」

「まだ始まったばかりですわ」

獣人の女性が笑う。

次々と使用人たちから声をかけられるのにグレンは鷹揚にうなずくと、使用人たちと同じく床の上に座った。

「私のことは気にせず、続けなさい」

そういつてグレンがグラスを持つと、アルバートが素早くその中にワインを注いだ。

使用人たちはグレンの言葉通り、めいめいに食事を再会した。

主役であるティエラの周囲には再び使用人たちが集まる。

「アルバートから聞いたかもしれないけど、あの方が私たちの主人

のグレン様よ」

獣人の女がにこやかに言う。

「顔は滅法凶悪だが、気は優しく力持ちだから心配するな、新人」
ドワーフの男がティエラの肩をたたいた。

とはいえ、ティエラは不信が拭いきれなかった。

所詮奴隷を買うような男だ。いつ夜伽を強制されるかわからない。邸の人間だって、新人を陥れる為に演技をしていないとも限らない。

あんな醜くてぶくぶくに太った人間、性根だって腐っているに違いない。

宴の中程でグレンは仕事があるからと抜けたが、彼の通った場所に悪臭が漂っているような錯覚を覚え、ティエラは眉をしかめた。
「ティエラ、言いたかないけど、人を見た目で判断するのはバカだよ」

海エルフのエイダが苦々しげに言う。

元々森エルフと海エルフは種族的に仲が悪いということもあり、森エルフであるティエラは苛つきながらエイダを睨んだ。エイダもティエラの態度に顔をしかめ、舌を出した。

「森エルフ様はみんな嫌味で性格が悪くて頭が固い連中ばかり！
そう言うтусつくと立ち上がり、そのままティエラから離れていつてしまった。

エイダの失礼な発言に憤然としたティエラだったが、人間の女性であるエイミーにたしなめられたので我慢した。

「あなたの気持ちも分かるのよ。でも、もっと素直な気持ちでここでの出来事を受け止めてほしいの」

そう笑うエイミーにすら警戒心を抱いたティエラだった。

それほどに、ティエラの奴隷生活は過酷だったのだ。

その後、すっかりワインを飲みすぎてしまったティエラは、早々に潰れてしまった。

アルバートによって使用人室のベッドに寝かされた彼女は、疲れも出たのかそのまま翌日までぐっすりと眠ることとなった。まるで夢のような一日だったと思いながら。

B面 グレンの野望

現在三十代半ばのグレン・グレゴリーは、齡十六にして唐突に前世の記憶を思い出した。

彼の前世は日本人であり、とある小さな会社の課長であつた。

死因はいわゆる過労死。関連企業に役職は昇進して出向したのはいいものの、朝七時には会社に出勤し日付が変わるまで帰れない、そんな激務の日々が続いた結果の過労死だつた。

そして彼が生まれ変わった先は、人間以外の種族も当然として存在し、なおかつ魔法という自然科学では解き明かせないような不思議な力が存在する世界だつた。

彼の肩書きを説明するなら、そこそこ田舎の領主。十年前に先代領主であるグレンの父が引退して引継が終わつたため、グレンが新しい領主である。

父の仕事の補佐をしていた時もそうだったが、いよいよ領主に就任した彼は思った。

領主というのは、国という巨大な企業から地域の運営を任された管理者であり、それすなわちエリアマネージャーである、と。

さらに言うなら領内の運営はかなりの裁量が領主に任されているため、実質彼はこの領地の取締役、すなわち社長であるとも言える。彼はときめいた。

前世では平社員から苦勞して管理職になつたというのに残業手当がつかない状態で平社員の時よりもさらに激務を課せられ、さらに権限は激しく制限されていた。商学部で学んだ知識をちつとも活かせずに悔しい思いをしていた。

それが今や領主という役職を得たことで激変したのだ。

他の領主から見れば田舎のそれほど良くもない領地だろう。国から興味も払われていない。しかし彼からすると一国一城の主になったようなもの。

税の徴収は財務や経理の仕事。公共工事は施設管理。働かせる役人については人事。収益を上げようとすることは営業や企画と言えよう。

そう。前世ではさえない課長だった彼は、異世界で社長となったのだ。

異世界では魔法が使えるせいかどうかかわらないが、工業の発達が大変遅れていた。情報網も発達していない。工場ではなく工房で職人が頑張るのが主流だった。

そして彼は思ったのだ。

商学部で学んだものの、日々成長していく現代日本ではすでに使えなくなった理論。それを今こそ使うべきではないかと。

日本人だった時の記憶を思い出した彼は、学校の図書館の文献を調べながら呟いたのだった。

「テイラーの科学的管理法って、通じるかな？」

彼の表情は玩具を目の前にした子供のようであった。

とまあ、それだけならば彼の人生は勝ち組だと言えただろう。領主は基本的に世襲制。グレゴリー家の後継ぎは彼だけで、他に兄弟はいない。

が、彼には致命的な欠点があった。
容姿がひどく醜かったのだ。

顔の作りというレベルではない。何を食べても太り、水を飲むだけでも太る異常な体質で、以前に断食したときには少しもやせなかつたくせに地味に死にかけた。

仕方がないので現状維持につとめているが、容姿だけでも初対面の人間には生理的に嫌われる。邪悪で醜悪に見えるらしい。

彼の父は多少顔の造形が悪いというところがあった。母は太りやすい体質だった。グレンは両親の悪いところを受け継いだのである。あるいは母親が彼を妊娠中に何か神様やら妖精やらに悪いことをした天罰かもしれない。

とかく、グレンにはどうしようもないことなのである。

そしてそれは周囲にも言えることであった。

学都と呼ばれる場所へ留学へ行く前、グレンはあまりよろしい後継ぎではなかった。これが将来領主になるのかと思うと暗澹たる思いを皆抱いていた。

しかし留学から帰って来たグレンは顔つきも言動もすっかり変わり、いかにもやる気のある、未来を担うにふさわしい心持に代わっていた。

が、なにぶん醜い。視界に入るだけでもおぞましい。気分が悪くなる。

生理的嫌悪程やつかいなものはない。皆グレンの性格が悪くないことは知っていたのだが、一人が屋敷を辞するとそれにつられるように次々と辞めていった。特に女性ひどかった。女性自身が厭うこともあれば、その両親が娘の身を心配して攪うように連れ帰ったこともある。手籠にされると危惧したらしい。辞めていった女性達

も同様である。

機械があろうとそれを操る人では必要である。機械すらない世界では、機械の何十倍もの手間がかかる手作業で仕事をしなければならない。

そんな状態での人手不足は致命的だった。

頭を抱えたグレンは、ある時出先で奇妙なものを見た。鞭を持った男が何人もの男女を鎖につないで引きつれているのである。

「あれはなんだ？」

「奴隷商人でございましょう」

長年グレゴリー家に仕えている執事が答えた。

奴隷と聞いて彼は留学中に学んだ知識を思い出した。

労働力としての人手が必要となるこの世界では、数多くの奴隷が存在した。

家事、農業、工芸、夜伽、他もろもろ。様々な用途がある。比較的知識を持った奴隷は値段が高い。また、顔が美しいものも値段が高い。よほど使い道のない奴隷でなければ転売も可能だ。奴隷は人ではなく財産扱いなのである。

財産の管理は個人の裁量に任されている。大事にするも使い捨てるも自由だ。

地球の奴隷との違いとして最たるものが制御装置の存在だろう。重々しい鉄の首輪で、決して主人の許可なしでは外れない。無理に外そうとすると魔法の効果で奴隷に苦痛が与えられる。それだけではない。制御装置は主人の命令一つで奴隷に苦痛を与えることができるし、発信器のような居場所を特定する機能も付いている。主人が許可した以上の距離を離れると、これまた奴隷が苦しむという塩梅だ。

この恐ろしい首輪のせいで、人攫いの被害者であろうと自ら身売りした人間であろうと、奴隷を買った主人には逆らえないし逃げられないというわけだ。主人が自らの意思で奴隷を解放して制御装置を外した場合は別であるが。

習った知識を一通りおさらいした彼は考えた。

つまり、奴隷を買えば一生その奴隷を使うことができるわけだ。転売も可能というのなら、つまり奴隷というのは長期資産の一種なのだろう。しかも運用しだいによっては資産価値を増やすことも可能と言っわけだ。

さらに言うなら、奴隷が主人に逆らえず、余所へ行くこともできないというのなら、散々技術を仕込んだ場合でも余所に引き抜かれるという事態には陥らないということだ。

奴隷を使う上では給金を出す必要はないが、食費や生活費などはこちらで準備しなければならない。が、そんなもの、住み込みが当然のこの世界では普通の使用人を雇ったところで同じである。

奴隷を買うとなっては初期費用は高いが、長く使えば減価償却もできるのではないだろうか。耐用年数は馬鹿長い。

また、通常の退職金は雇用している期間に積み立てておく後払いの給料であるが、奴隷の購入費用は給料の先払いと考えればとんとんではなかろうか。

そして彼はグレンは閃いた。

つまり、奴隷を買ってことは、終身雇用することであると。

A面 歓迎会の翌朝

歓迎会の翌朝、ひどい二日酔いのティエラを眠りから覚めたのはエイダの不機嫌そうな声だった。

「いい御身分ね！ 初日から酔いつぶれて二日目には寝坊？ もうお日様だつてすっかり昇ってるんだからさっさと起きなさいよ！」
甲高い声が頭に響き、痛む頭を押さえながらティエラはノロノロと体を起した。

「もう朝……？」

「そうよ！ 朝食の時間に遅れちゃうわ。早く起きて準備なさいっ」
一気に言い切ると、エイダは真新しい服を一式ティエラのベッドの上に投げ出した。ご丁寧にも下着まで準備してある。ベッドのわきには真新しい靴も用意してあった。

寝起きで頭が回らないティエラは、二度ほど瞬きをしてその服を見つめた。

「お仕着せ！ うちの制服よ。まさかそのドレスで仕事する気じゃないでしょ？」

反応の鈍いティエラにいらついているのか、エイダは腰に拳を当ててふくれっ面で言った。

昨日のエイダは年相応の可愛らしいチュニックを着ていたが、今日はシンプルな紺色のドレスを着ていた。ティエラに渡されたものと同じものである。肩にかかる程度のパーマっ毛の強い赤茶けた短い髪をポニーテールにして白のリボンでまとめている。

「いい？ ここの水瓶と洗面器は使っていいわ。タオルも置いてあるから。そのリボンは首につけたままにしときなさい。十分で支度して」

チェストの上を指差したエイダはつつけんどんな態度で言う。

「え、うん……」

「早く！ あと九分！」

「分かったわよ！」

大きな声でせっつかれて、ティエラは眉をしかめた。これだからガサツな海エルフは嫌いなのだ。

結局十三分かかってティエラは準備を完了させた。

「——うん、服はちゃんと着れてるみたいね」

ティエラの身だしなみをチェックしたエイダは満足げに頷いた。

「当たり前でしょう。人を何だと思ってるの」

その態度に腹を立てたティエラが少々恨みがましく言うと、エイダはあっけらかんと言った。

「買われたての奴隷でしょ。まだ雇用契約結んでないんだし」

唐突に奴隷という現実を突き付けられたため、ティエラは思わず衝撃を受けて固まった。後半の言葉を聞き逃すほどに。

「さ、ご飯食べに行くよ。ぐずぐずしてたら朝礼に遅れちゃう」

動き出さないティエラの腕をエイダがとった。そしてそのまま引きずるように部屋を出る。

体調不良と相まって顔面蒼白になっているティエラを見て、獣人の女性クレアがすっ飛んできた。彼女もまた、紺のドレスを着ていた。

「あらやだ、顔色真つ青じゃない。やっぱり昨日ブルーノが飲ませ過ぎたんだわ。今すぐ治してあげるからね」

言いながらクレアはティエラの目の前に手をかざした。短い詠唱の後にその手が淡く光り、ティエラの体調の悪さが和らぐのが分かった。治癒魔法だ。

「エイダ、入ってきたばかりの子は気をつかって上げなさいって言ったでしょう？」

「単なる二日酔いじゃん。心配しすぎだよ」

「二日酔いで新人研修を受けさせたら能率が悪いでしょ。二度手間になった分はあなたにしわ寄せが来るのよ」

「はい」

お母さん然とした調子でお小言を言うクレアに、エイダも落ち込んだ様子で返事をした。

「まあそう叱ってやるなや、クレア。新入りも腹を空かせてる。早く飯を食わせてやれ」

「元はと言えばあなたが無理やり飲ませたからでしょう、ブルーノ！」

近くを通りかかってかつかと笑うドワーフをクレアが睨んだ。ブルーノは怖い怖いと肩をすくめてそのまま歩いて行った。クレアはため息をつく。

「とにかく、朝ごはんにしましょう。朝礼に遅れちゃうわ」

とりあえずその言葉に頷きながら、内心でティエラは首を傾げた。先ほどから彼女たちの言っている朝礼とはなんだろう？ と。

しかしそれに対して上手く質問をすることができないままに朝食を食べることになった。食堂に給仕係はおらず、自分たちでカウンターまで行って料理を貰ってくるらしい。四角いトレイの上に載せられたのは主食の焼きたてのライ麦パンとソラマメのスープ、そしてスパイスの香りが漂うキャベツと鶏肉の炒め物だ。少量だが、新鮮なミルクももらえた。いずれにせよ、奴隷商の所にいたときの食事とは雲泥の差だ。

「ご飯は一日三回、決まった時間に食堂で食べるようになってるの。昼食に限って朝か前日に言っとけばお弁当も作ってもらえるのよ。来るのが遅いと料理がなくなっちゃうときがあるから気をつけて」と、クレアが説明する。エイダは配ぜんの係に頼んで大盛りにしてもらった料理を勢いよく食べていたため無言である。海エルフは森エルフに比べると体力があり、食欲も旺盛なのである。まるまると太ったソラマメも、あつという間に噛み砕かれてエイダの腹の中へと納まっっていく。

「あそこに時計があるでしょう？ あれが八時になったら朝礼が始まるから、それまでに広間に行くようにしてね。あとエイダとはこれから同室になるけど、彼女が寝坊するようなら叩き起こして」

「ひふれいな！　わはひはねぼうしない！」
「今日はね」

クレアが呆れた顔で言う。

ティエラは何とも言えない気分になっていた。

彼女の奴隷としての区分はオールラウンド。つまりなんでも可。といっても、こと森エルフの奴隷というのは見た目が良いものが多いので、大抵は金持ちの変態に買われることが多いと聞いていた。が、昨日からの様子を見るに、まるで地方から出稼ぎにきたのと大差ないではないか。

奴隷は高価な商品だ。替えの利く使用人とは違う。

わからないことほど怖いことはない。

先の見えない不安がティエラを苛んだ。

B面 奴隷購入

思い立ったが吉日、グレンは自身の思いつきにご満悦になりつつ、執事を連れて奴隷を買いに出かけた。

奴隷商には何種類がある。まず大雑把に分けるとすると合法と違法。奴隷商人をするには国の許可が必要だが、まあある意味飾りのようなものだ。よほど悪質でなければ偽造された許可証を持っていたてもお目こぼしされてしまう。逆に言えば、ちゃんとした許可証を持っている奴隷商は国のお墨付き、安心できる奴隷商ということになる。

さらに細分するなら、奴隷の用途ごとに特化した奴隷商がある。一番多いのはやはり農業用奴隷で、二番目は家事などの家庭内での仕事をする奴隷だ。三番目に多いのは鉱山などでの重労働をする奴隷だが、これは現地に奴隷商が直接赴くため、見る機会は少ない。そして四番目、一つの奴隷商が扱う数こそ少ないものの、各地で売られている人気商品、それが性的な用途の奴隷である。

当然ながらグレンの目的は家庭内労働用の奴隷であったのだが。

「いかがですか、領主様。よいものを取りそろえております」

小太りの奴隷商の男が揉み手をしながらグレンに愛想を振りまく。広々としたテントの中には十ほどの檻があり、中には見目のよい奴隷が閉じ込められていた。グレンは知らなかったが、全て性的な用途の奴隷であった。グレンの見た目から、奴隷商の人間が勝手にそうと判断したためである。

「ふむ。なるべくなら読み書きができるのがいいんだが。それと仕事を熱心にするのがいい」

社員教育するにあたって、流石に読み書きから始めていては面倒だ。なるべく頭がよくて、学のあるものが欲しかった。そして勤務態度が真面目な人柄が望ましい。

が、グレンの言葉は見事に誤解された。

「でしたらこちらはいかがでしょう？　見事な歌声と舌技を持っております」

と、奴隷商の男は二十代前半の女を示す。艶っぽい体つきの女は、どこか壊れているのか目がうつろである。グレンの視線に気づいた女は、怯えるように視線をそらした。全身で嫌だと訴えている。

何とはなしに話に通じていないと悟ったグレンは言い方を変えることにした。

「頭がよいのがいい。よく気がついて心配りができるのはいいか」
「でしたらこちらはいかがでしょう。元は南方の貴族のところにした奴隷ですが、話題豊富で夜の方を盛り上げるのも上手で——」
「もういい」

グレンはため息をついて遮った。何故か話を通じないと悟ったのだ。グレンがテントの中に目を走らせた。グレンの視線に気づいた奴隷も人間も、一様に畏怖と嫌悪を抱いて視線をそらす。グレンは自身の容姿を恨んだ。

と、

「——誇り高きものは自己を高めよ。自己研鑽は他者に捧ぐものである」

聞き覚えのある言葉にグレンは声の方に首を巡らせた。

声の主は檻の中にいた。エルフの青年だった。グレンの方を挑むように見ている。

「ほう」

グレンは彼の方へと近づいて行った。

「スキエンティア学院の校訓を知っているとは。関係者か？」

「卒業生です」

青年は淡々と答える。青年の言葉にグレンは目を丸くした。スキエンティア学院というのは国でも一二を争うハイレベルの学び舎である。グレンが留学していた学校の近所ではあったが、スキエンティア学院グレンの学校では月とスッポンである。

「専攻は？」

「政治学全般を」

「卒業論文は」

「地方領地における人口流出問題と労働力確保について」

「おい、こいつはいくらだ」

グレンは振り返って尋ねる。

「は、はい」

奴隷商は一瞬まごついたが、すぐに脳内での計算を始めた。

「二千シリルになります」

庶民ならば三年は軽く遊んで暮らせる金額である。

「高い。負ける」

「ですがなにぶん、教養のある奴隷ですので……元値も張っていますし」

にやにやと崩れた愛想笑いを浮かべながら奴隷商が言うが、

「私は百シリルで売られました」

奴隷の青年が冷たい声で言う。

「元値の二十倍か」

グレンも冷たい声で奴隷商を睨む。奴隷商は一瞬震えあがったが、すぐに商売用の顔に切り替えた。

「我々も商売ですし、奴隷の維持にもお金がかかりますので」

「私を買われたのは一週間前です」

さらに奴隷の青年が追撃する。

グレンは再び奴隷の青年を見る。一週間と言う割には顔色が悪く、生傷も多い。前方へと投げ出された足に包帯が巻かれている。

「足に怪我をしているようだが」

「この男にやられました」

青年は淡々と答える。

グレンは再び奴隷商へと視線をやった。

「三百シリルだな」

「そんな殺生な！　せめて千シリルで」

「許可証は偽造です」

「ほう。ならしよつ引いて全員押収するか」

青年とグレンの追撃に、奴隷商は肩を落とした。

「……五百シリル」

「三百五十シリル」

「四百シリル」

「ならそれで手を打とう」

グレンは悪びれた様子もなく鷹揚に頷いた。

支払いを現金で済ませると、グレンは奴隷商の肩を叩いた。

「なに、こいつの具合が良ければまた買いに来てやるさ」

「……ありがとうございます」

商売人としての矜持でなんとか笑顔を作った奴隷商だったが、正直な話、二度と来てほしくないと痛切に思ったのだった。

グレンが最初買った奴隷はアルバートと言った。友人に騙されて二束三文で奴隷商に売り飛ばされたのだという。

アルバートを屋敷へ連れて帰ったグレンは、最年長の家令にアルバートを引き合わせた。

「一年でこいつを一人前の家令となるように仕込め」

「は……？ この奴隷を、ですか？」

家令は信じられないといった顔で聞き返した。

「ああ。一年後、こいつが使えるようになったらお前がこの屋敷を辞すると言つても引き留めない。退職金も弾もう」

グレンがなるべく感情を込めずに言つと、家令も感情を表に出さずに深々と頭を下げて承諾したのだった。

そしてその一年後、老人の家令は多額の退職金と共に嬉々として実家へと帰り、アルバートがグレゴリー家の家令となったのだった。

A面 グレゴリー邸の使用人

グレゴリー邸の朝は朝礼から始まる。

広間に屋敷中の使用人が集まり、連絡事項だの今日の予定だのを確認するのである。前に出て仕切りをするのは家令のアルバートだが、グレンも壁際に陣取って参加している。そもそもこの朝礼はグレンの発案である。実は終礼もしようとしていたのだが、勤務形態から考えると難しいと分かったためにそちらは廃案になった。

「――伝達事項は以上。最後に、昨日の歓迎会に出席した人も多いから知っているだろうが、今日から一緒に働く新しい仲間、ティエラだ。ティエラ、改めて自己紹介を」

「え？」

唐突な話に驚きつつも、エイダに背中を押されてティエラは前へと出た。振り返ると種族や年齢、性別こそ違うが皆同じようなお仕着せを着た男女がずらりと並んでいる光景にぎくりとする。

「ティ、ティエラ・クリステイです」

緊張で体を硬くする少女を、三十人ほどの使用人たちが温かな目で見守る。その何とも言えない居心地の悪さに、ティエラは逃げ出したい気分になった。奴隷なので逃げられないのだが。

「彼女はハウスメイドになる予定だ。教育係はエイダ。最初は分からないことが多いだろうから、気をつけておいてくれ。本日の朝礼はこれで終わる。各自、仕事に就け」

簡潔な言葉と共に朝礼は終わり、使用人たちはそれぞれの仕事を始めるべく散っていった。

「まったく。なんで森エルフ様の教育係が私になっちゃったんだか」
エイダの開口一番の台詞に、ティエラは眉根を寄せた。

「ま、とりあえず今日の午前中は邸の中の案内するから。午後からはエイミーにお勉強教えて貰ってね」

「うん……」

数々の不満を抑え、ティエラは頷いた。

それから午前中は邸の中を順繰りに案内して貰った。

グレゴリー邸は地方領主の館というだけあって、役場のような機能も兼ねていた。一階の道にスペースが公のもので、そこ以外と二階と三階がグレゴリー家の領分だった。

公のスペースには何人が通いの役人が来て仕事をしていたが、ほとんどが見たことのある顔、つまりはこの屋敷の使用人たちだった。「グレン様はあまりお身体が丈夫じゃないから、基本的に屋敷内で仕事をする人が多いんだよ。以前はもっと離れた場所に役所があったんだけど、グレン様が様子を見に行くのが大変だからって何年か前にこの屋敷の近所に移設して、中でもグレン様の指示が必要になる部署だけこの屋敷の中に移したの」

そうエイダは説明した。

「使用人の数はそれほど多くないから、立派なお貴族様の御屋敷とは違って一人でいろんな仕事をしなきゃいけないの。怠けものや無能な働き者はいらないから覚悟してね」

「覚悟……？」

ティエラが首を傾げると、エイダは少しだけ目を眇めた。

「もう一度奴隷商に売られる覚悟。使えない奴は差し戻しだからね」

ティエラの顔が引きつった。さっと顔から血の気が引く。

「差し、戻し……？」

ティエラの顔色に気付いたのか、エイダは慌てて付け加えた。

「うん。ま、滅多にいないけどね。グレン様は雇えるうちは雇ってくださいって言うてるし！」

滅多に、ということとは過去にはいたということか。

ティエラは慄然とした。奴隷商のところで受けた恥辱を思い出す。下卑た言葉、舐めまわすような視線、無遠慮な暴力、粗末な衣食住、そして完全なる商品扱い。もう二度と戻りたくはなかった。

「……なんでここでそんな反応するのかなあ」

安心させるはずが落ち込んでしまったティエラを見て、エイダは頭を抱えた。困り果てたようなエイダの声は、残念ながらティエラの耳に届くことはなかった。

午後、ティエラは図書室にいた。

図書室といってもスペースの三分の一程がカーテンで区切られ、机と椅子の置いてある自習スペースになっていた。採光用の大きな窓があり、壁には黒板が掛けてあった。図書室の残り三分の二に所狭しと本が並んでいる。

「それじゃこれから、仕事の流れや一年の流れ、この屋敷の決まりごとなんかを説明していくわね。エイダの説明もあっただろうから、二回目になったらごめんなさい」

髪に白いものが混ざりはじめたエイミーという女性がゆったりとした調子で説明を始めた。

「まずこれは全ての使用人に言えることなのだけど、朝昼晩には食堂で食事をするの。屋敷中に時計があるでしょう？ 基本的には朝は七時、昼は十二時、晩は五時からよ。朝礼は八時から基本的に全員参加。仕事は朝礼後から夕食の時間までなんだけど、ハウスメイドは交代で一時間だけ休憩していいことになってるの」

「は、はあ……」

「あなたは新人だから、基本的にエイダと同じ仕事をしてもらうわ。今日は例外だけど、明日からは食事の下ごしらえの準備と掃除とあと洗濯ね」

ティエラはただただ頷くしかできなかった。

「それから使用人のお休みは一週間に二日あるの」

「ふ、二日!? 安息日だけじゃなくてですか!？」

信じられない話を聞いて、ティエラは声を上げた。

一般的に、安息日と言われる日曜日以外は仕事するのが普通である。ましてや奴隷だ。休日など与えられるはずがないと思っていた。

ティエラの反応に、エミリーは悪戯っぽく笑った。

「そうよ。でもうちは『一日休養、一日教養』がモットーだから、大抵の人はどちらかの休みの日を勉強に充てているわね」

そう言うエイミーの表情に影は見あたらない。

「魔法の練習をする人もいれば、この図書室も解放されてるから読み書きの勉強をする人もいるわ。家事の技術を磨くための勉強会をする人たちもいるし、余所に習い事へ行く人もいるの。習い事もある程度までグレン様が費用を出して下さるのよ。あなたも何か勉強したいことがあれば言ってみたらいいわ」

その言葉にティエラは絶句した。

基本的に、自分の仕事以外の勉強できるというのは贅沢である。よほど頑張らなければ金にもならないからだ。考えて見てほしい。例えばお針子が古代文明について勉強したとして、それをどう仕事に活かせるというのか。料理人が馬術を習ったところで、料理が上手くなるわけではない。学んで賢くなったところで、出来る仕事の決まっている下層階級などでは仕事に活かせるとは限らない。それゆえに貴族や金持ちの人間でなければ仕事をしているのに勉強に丸々一日割くことなんてできないのである。

さらにエイミーの爆弾発言は続く。

「二か月目から月の初めにお給金をもらえて、三ヶ月目から他の使用人と一緒に休日に出出することもできるようになるわ。半年務めあげたら一人で外出もできるようになるの」

ティエラの頭は爆発する寸前だった。

「奴隷、なんですよね、私」

自ら口にすることは屈辱ではあったが、思わず確認せずにはいられなかった。

エイミーはくすつと笑う。

「ええ。それから私やこの屋敷にいるみんなもね」

ティエラは彼女の言葉の意味をたっぷり十秒は考えた。

考えて考えた結果、

「ひどい冗談ですね」

「本当のことなのに」

エイミーは心外そうに言う。

「そりゃあ普通の奴隷ならもう少しこき使われるでしょうけど、グレん様だもの。あの方は私達のことを大事にしてくださっているのよ」

心底うれしそうに言うエイミーに、ティエラは目を回しそうになったのだった。

エイミーの言葉が全て本当であるとティエラが知る日はそう遠くない。

B面 叶えたかった夢

グレンには夢があった。

彼は前世で労働者として酷使されていた。

長時間の拘束、サービス残業、休日出勤は当たり前。部下の失敗は彼の責任、上司の失敗は彼のせい。有給？ そんなものは申請を出した時点で蹴られて罵詈雑言を浴びせられるに決まっている。

日々の仕事に精いっぱい、たまの休日は終日たまっていた家事をするかぐつたりしているかのどちらかだった。

前世の彼が社会人になる前には、夢があった。

同行の士が集まる社内サークル、和気あいあいとした慰安旅行、桜の下での花見、無礼講の忘年会、日々のコミュニケーションとなる飲み会、有給を使って連休を作ったの海外旅行、上下関係なしの社内運動会。

ほとんど仕事に関係ない辺りが若者らしかった彼だが、現実は非情であった。実現したことは何一つない。唯一実現したと言えば日々の飲み会であるが、基本的に仕事の延長である。接待もしたり。

彼が就職したのは社内の福利厚生がほとんどないに等しいブラック企業だった。

さらには上司も悪かった。パワハラ上司は無駄に口が達者で、自分のミスを下下に押し付けるのが上手かった。さらに気にいらぬ部下の人格攻撃をして自主退社に追い込むのが十八番だった。ご多分に洩れず、前世の彼も人格攻撃を食らったが、上司に阿ることでなんとか被害を回避した。それにしたって、精神的に辛いものがある。

った。

だから彼には夢があった。

自分が偉くなったら、部下には優しくしよう、と。

そして異世界での領主となった彼はさらに夢が広がった。

彼は社長である。社長であるからには部下がいる。たくさんいるならばそれは一種の組織である。組織であるならば決まりを作る必要がある。そして自分は従業員には気持ちよく働いてもらいたい。

そうだ、福利厚生を充実させよう。

グレンはそう思い立った。

社内サークル、慰安旅行、飲み会、有給、週休二日、資格取得や勉強の補助制度、出産休暇に育児休暇。医療補助も出したい。

調べてみたところ、この世界では社員の福利厚生という観念が薄いらしい。もちろん個別にはあるが、マニュアル化している場所は少ないようだ。そもそも会社という概念も薄い。

彼の脳内辞書に代償行為という言葉はない。僕の前に道はない、僕のうしろに道はできる、と奮起したグレンであったが問題があった。

使用人がグレンを嫌がって次々に辞めていってしまうのである。

いかにグレンが素晴らしいと思う福利厚生を充実させようとも、使う人間がいらないのでは意味がない。さらに言うならグレンの言葉

は他人にやたらと誤解されやすかったため、上手く説明もできなかった。そのため理解者はゼロ。

よって、彼の発案が現地の文化と融合しつつ実施されていくのは、彼の意を正確に汲み取ることに長けたアルバートが家令となった後になるのだった。

A面 エルフの奴隷とは

世の中には貧困を理由に自ら奴隷へと身を落とす人間が少なくないが、ことエルフにおいてはそれは滅多になかった。

不老長命のエルフは子供が出来にくく、生まれた子供はその村ぐるみで育てられる。若者は希望の芽だ。

はらわたの煮えくり返るような思いを味わって奴隷に成り下がったアルバート・マクレーンにとって、グレンとの出会いは不幸中の幸い、否、僥倖だったと言える。

アルバートは奴隷になる前は、前途有望な役人であった。

スキエンティア学院を優秀な成績で卒業した彼はあちこちからお声がかかったが、恩師のアドバイスによって国の政治に携わる機関へと勤めることにした。

実際、勤め始めた彼の評判は良いものだった。仕事熱心で真面目、知識が豊富で頭が切れる。

ただアルバートには不満があった。彼の勤めるところに限ったことではなかったが、貴族が幅を利かせていたのだ。上下の風通しが悪く、下の意見が通りづらい。

優秀な上に清廉潔白なアルバートは、そうでないものにとっては非常に邪魔な存在であった。

といっても、彼を嵌めたのは同僚でも上司でもない。
彼の幼馴染の男だった。

原因はアルバートの婚約者だった。いわゆる横恋慕というやつだ。その手の感情には鈍かったアルバートは、幼馴染が勝手に思いつめた拳句に自分を殺したい程憎んでいるとは全く気付いていなかった。久しぶりに幼馴染に呼び出され、杯を交わした時だった。ワインの中には睡眠薬が混入されていた。薬物に対する耐性の高いエルフの彼だったが、あまりにも強力なそれに、瞬く間に意識を失ってしまったのだった。

そして次に気付いた時、彼の首には重い鉄の鎖が嵌められていた。

目の前には心底うれしそうに笑う幼馴染と奴隷商。わざわざアルバートが意識を取り戻すのを待って始められた売買交渉で、エルフの奴隷としてはありえないほどの安さで彼は売られたのだった。性的な用途の奴隷として。

数日、その町にいた。職場の人間や郷里の仲間たちがアルバートの失踪に気付かないわけがなかったが、救助の手が差し伸べられることはなかった。

脱走は全て未遂に終わり、怪我が増えただけだった。

グレンを初めて見たとき、アルバートは思わず蔑んだ目で彼を見てしまった。

自分の奴隷としての用途は分かっている。醜い男が、金にあかして一時の快楽を求めに来たのかと思ったのだ。

見れば見るほど、不格好な男だった。いっそ抽象画のような面白

さがあるような気がしなくもない。あるいは悪魔の下僕を描いた宗教画か。

しかし、どうにもその目には理性の光が宿っているように見えた。そして彼と奴隷商の会話に耳を傾けたアルバートは違和感を感じたのだ。

男は言う。なるべくなら読み書きができるのがいい、仕事熱心なのがいい、と。

その時点でまずおかしかった。

そして男は奴隷商が進めた奴隷を見ると、頭痛でも堪えるような顔をしてさらに言った。頭がよくて、気配りができるのがいい、と。

まるで働き手を探しているような物言いだ。そもそも、男が檻の中を見渡す目は、性的なそれとは遠くかけ離れている。

アルバートの頭に、一つの推論が浮かんだ。

そして彼はその可能性に懸けた。

「——誇り高きものは自己を高めよ。自己研鑽は他者に捧ぐものである」

彼の母校の校訓である。

もし仮に男の目的が自分の思っているものと違っていたら、興味は示さないだろうと思ったのだ。

果たして、その予想は当たっていた。

連れて帰られる道中は質問攻めだった。

何を勉強したのか、何が得意か、何ができるのか、苦手分野は、人付き合いは得意か、なぜ高学歴なエルフが奴隷になったのか。

アルバートはそれに一つ一つ淡々と答えていった。グレンも一通りのことを聞くと、下世話な追求することはなかった。やはり見た目と中身が違っているようだ。アルバートは確信した。

そして屋敷につく直前、グレンは驚くべき発言をした。

「お前には、うちの家令になってもらう」

と。

首輪をつけた家令など聞いたことがない。

そのとんでもない命令に啞然としたアルバートだったが、さらに彼の屋敷に到着してからはその寂れ具合に驚くことになったのだ。た。

アルバートが自己の選択を後悔しかけた瞬間であった。

夕食後、アルバートはエイミーを呼び出した。

「それで、ティエラの様子は？」

「まだ何とも。この屋敷の仕組みが何もかも信じられないみたい。

簡潔な質問に、エイミーは苦笑を洩らした。

「……森エルフは警戒心が強い。もともと仲間以外にはなかなか心を開かないからな。奴隷になった経緯もろくなものじゃないだろう。時間はかかるかもしれないが、彼女が心を開くまで根気強く付き合っ
てやってくれ」

アルバートがため息をいって言うと、エイミーはくすりと笑った。

「確かに。あなたは私より先に来ていたのに、グレン様を信頼する
ようになったのは私よりも後だったものね」

グレゴリー邸では二人は古参の使用人だ。エイミーの方がアルバ
ートより半年ほど遅れてこの屋敷へとやってきた。最初は戸惑って
いたエイミーだったが、順応するのは早かった。逆にアルバートは
いつまで経っても壁が取れなかった手合いである。

アルバートは彼女の言葉に少々気まずげに視線をそらしたが、や
がて咳払いをして気を取り直した。

「女性同士の方が何かと分かりあえることも多いだろう。何かあれ
ばすぐに報告してくれ」

「はい、かしこまりました」

エイミーは茶目つけたつぷりに笑った。

と、エイミーは窓の外へと目をやった。

「でも意外と早くに慣れるかもしれないわね」
「うん？」

彼女の視線に釣られるように、アルバートは窓の外へと視線をやった。

星明かりの照らす中庭で、森エルフと海エルフの少女が怒鳴り合っているようだった。

「喧嘩するほど仲がいいって言うもの。友達ができたらきつと早いわ。あなたもエイダと仲良しでしょう？ 案外森エルフと海エルフって相性がいいのね」

てらいのない笑顔でそう言われ、アルバートはこめかみを押さえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6678u/>

彼は優しいご主人様

2011年12月5日23時48分発行